

## chapter 03

# 障害のある人の 芸術文化活動の、 いま。

### 「調査・発掘、評価・発信」事業概要

宮城県内の障害のある人やその家族、  
福祉事業所などで芸術活動を支援する人たちは、  
いまどのような状況にあるのでしょうか。  
おおよそ1年間かけて行った事業を通して、  
SOUPは障害者の芸術活動の  
その価値と未来を、ここに提案します。





# 調査・発掘、評価・発信事業の概要

## 1. 事業の目的

事業の実施にあたり、モデル事業で必須とされる「調査・発掘、評価・発信委員」を設置しました。学芸員、フリーランスのキュレーター、研究者、ライター、事務局スタッフから構成し、委員会では次の点を確認しました。

### 調査・発掘

- 全県アンケートを実施し、これまで出会ったことのない作家や支援者の情報を得ること。その内容は、障害のある生徒・学生、社会人が、いつどこでどのような活動をしているのかを把握する「活動状況調査」、特筆される作家・作品・活動を発掘し活動の発展につなげるための「作家・作品調査」の二つの軸とすること。
- アンケートの結果から、特筆すべき作家や活動団体を訪問しヒアリングすること。また訪問先の抽出にあたっては、可能な限り異なるスタイルの学校、福祉施設、個人を訪問し、障害のある人の芸術文化活動を取り巻く現状を丁寧に観察すること。また、これまで訪問したことのない現場に積極的に足を運び、新しいネットワークをつくること。

### 評価・発信

- 優れた作家・作品とは何か。その評価軸を設定し、作家・作品を選ぶこと。あわせてその作家・作品を生み出した環境、作家・作品を介した社会への波及などにも眼をむけてその価値についても評価を行うこと。そして、障害のある人が芸術文化活動の機会を享受するためには、何が不足しているか、その解消のためにはどのような仕組みやプログラムを整備するべきか、課題解決のための視点や仕組みの提言をすること。
- 展覧会で発信するとともに、ウェブサイトで作家・作品の公開をめざすこと。また調査・発掘、評価・発信の内容を報告書にまとめ、紙面およびwebサイトで公開すること。

### 調査・発掘、評価・発信委員

薄井真矢：せんだいメディアテーク学芸員（公益財団法人仙台市市民文化事業団）

古山周太郎：東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科准教授／一般社団法人邑サポート理事

鈴木理恵子：女子美術大学准教授

高橋創一：編集、執筆、その他／障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城 編集・ライター

三浦晴子：フォトグラファー、キュレーター／障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城 アートディレクター

柴崎由美子：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン代表理事

### 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局スタッフ

青木ユカリ<sup>〔\*〕</sup>／佐々木えりな／武田和恵

＊調査・発掘事業におけるプロジェクトスタッフ

※調査・発掘、評価・発信委員会は、計3回実施。7月25日：事業目的・アンケート概要の確認、10月27日：アンケート回収状況・訪問調査の手法確認、1月5日：アンケート速報・訪問調査の状況確認。これ以後、2月～3月にかけて、アンケートの分析方法、作家・作品の評価、訪問調査のレポート方法、提言に関連し、各委員と事務局が個別に会議をもちました。

## 2. 事業の概要

### （1）アンケート調査

#### アンケート作成および広報に関わった協力機関

宮城県保健福祉部障害福祉課／宮城県教育庁特別支援教育室／仙台市健康福祉局健康福祉部障害者支援課／仙台市教育局学校教育部特別支援教育課

### 調査方法

- 宮城県内の中学校、高等学校、特別支援学校（中学部以降）、社会福祉施設、民間のアトリエ、障害のある作家などを対象にアンケートを実施。
- 配布数、回収数、回収率、アンケート方法、期間については次の通り。

	福祉施設	在宅障害者 <sup>〔*1〕</sup>	障害者雇用企業	民間アトリエ他 <sup>〔*1〕</sup>	支援学校（中学部以降）	中学校支援学級	定時制高校	合計
配布数	430	30	50	10	26	218	18	782
回収数	53	14	0	5	5	13	1	91
回収率	12.3%	46.6%	0%	50%	19.2%	5.9%	5.5%	11.6%
方法	郵送 <sup>〔*2〕</sup>	郵送	郵送	郵送	郵送 <sup>〔*2〕</sup>	郵送 <sup>〔*2〕</sup>	郵送 <sup>〔*2〕</sup>	
期間	①2016年9月23日（金）～10月23日（日）、②～12月17日（土）							

- ＊1：在宅障害者、民間アトリエは事務局のデータベースに登録された方たちに送付しました。
- ＊2：回収率が悪かった10月、協力機関のアドバイスと協力により2回目の郵送およびメール配信も実施しました。
- アンケートに記入いただいた情報は、個人を特定しない統計として利用すること、報告書への掲載およびその他の関連機関のデータに提供していく場合があることをあらかじめ説明しました。

### 主な調査内容

- 【第1部】いくつになっても表現したい。障害のある生徒・学生、社会人の「活動状況調査」、【第2部】アーティストとして生きる。表現活動をしている人の「作家・作品調査」から構成しました。
- 【第1部】は、障害のある生徒・学生、社会人が、いつどこでどのような活動をしているのかを把握する内容としました。また、教育機関にアンケートの記載をお願いすることで、学校から卒業し、社会へ出ていく障害のある人たちの活動の連続性にどのような課題があるかを明らかにすることも目的にしました。あわせて福祉施設の現場では、どのような資源があり、一方で何が不足しているか、課題を把握することにつとめました。
- 【第2部】は、特筆される作家・作品・活動を発掘し、活動の発展につなげるための基礎調査としました。
- アンケートのフォームは『調査・発掘、評価・発信 報告書』17-24ページに掲載しています。

● 右：『まげると世界が変わる 障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城 2016-2017 調査・発掘、評価・発信 報告書』（本記事内では『調査・発掘、評価・発信 報告書』。2017年3月発行、B5、64ページ）



### （2）訪問調査、発掘

- アンケートの結果から、調査・発掘、評価・発信委員と事務局が、障害のある個人・団体、特別支援学校ならびに支援学級を抽出し、訪問調査を実施しました。2016年11月から2017年2月の間で、特別支援学校1、高等学園1、特別支援学級1、福祉施設4、個人5カ所を訪問、ヒアリングしました。
- 障害のある人の芸術文化活動を取り巻く現状を丁寧に観察することにつとめました。
- 特筆される作家・作品・活動のデータはウェブサイトで公開すること、また公開するデータは、芸術文化関係者などによる展覧会、ワークショップ、パフォーミングアーツ、二次使用のための情報として活用されることをあらかじめ説明しました。

### （3）評価・発信

- 委員会では、①現代アート（作品・表現の評価）、②作品の売買（美術市場など）、③二次利用（商用利用など）、④環境、これら4つの視点を評価軸とし、作家・作品・活動の評価を実施しました。
- アンケートの【第2部】「作家・作品調査」に記載した人、訪問調査で見聞した人と合計48人から、最終的に22人の作家を選定しました。
- 作家・作品・活動のデータのウェブサイト公開について、改めてご本人または代理の方の同意をとって作業をすすめました。
- 原画を集荷し、作品を撮影・スキャンしてデジタルデータを作成。また、創作活動のきっかけ、様子、発表履歴を集め、それを編集してプロフィールを作成。あわせてウェブサイトで公開しました。
- 優れた作家・作品とは何か、作家・作品を生み出した環境、作家・作品を介した社会への波及など、その観察と問題意識は、委員とスタッフのレポート（薄井、古山、高橋、三浦、青木）に記載しています。
- 障害のある人が芸術文化活動の機会を享受するためには、何が不足しているか、その課題の解決のためにはどのような仕組みやプログラムを整備するべきか、提言については、委員のレポート（鈴木、柴崎）に記載しています。

## 報告I. アンケート調査

障害のある人は、いつどこで  
どのような表現活動をしているか。

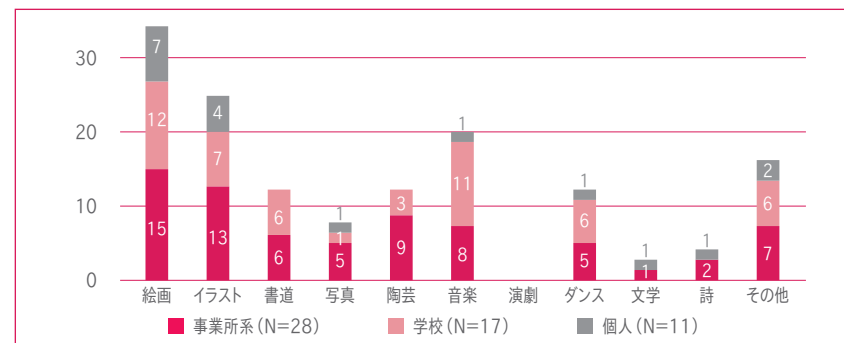
宮城県全域を対象にアンケートを実施し、これまで出会ったことのない作家や支援者の情報を得ることを目的としました。宮城県内の中学校、高等学校、特別支援学校（中学部以降）、社会福祉施設、民間のアトリエ、障害のある作家などを対象にアンケートを実施しました。

アンケートの内容は、2部構成。【第1部】は、障害のある生徒・学生、社会人の「活動状況調査」で、いつどこでどのような活動をしているかを把握する内容としました。【第2部】は、表現活動をしている人の「作家・作品調査」で、特筆される作家・作品・活動を発掘し、活動の発展につなげるための基礎調査としました。

## I. 集計結果 選択式の回答をグラフにまとめ、紹介しています。

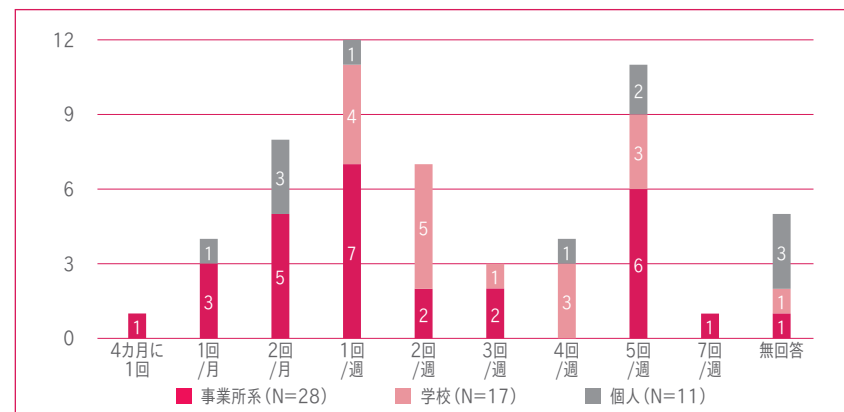
## 1. 芸術文化活動の概要についてお尋ねします。『調査・発掘、評価・発信 報告書』7-9 ページより抜粋

## (4) 芸術文化活動の内容をおしえてください。(複数回答)



- その他としては、布や糸を使った織物、粘土や木材をつかった立体作品、ガラスを使用した作品などが含まれる。

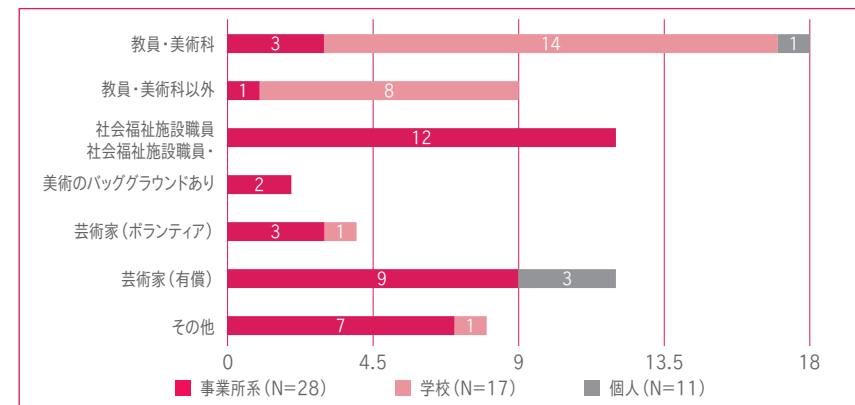
## (8) 活動の回数をおしえてください。(記載一部省略)



- 大きく週1回と週5回の山に分かれており、活動を頻繁に行っているところとそうでないところがある。

## 2. 活動の指導・支援についてお尋ねします。『調査・発掘、評価・発信 報告書』10ページより抜粋

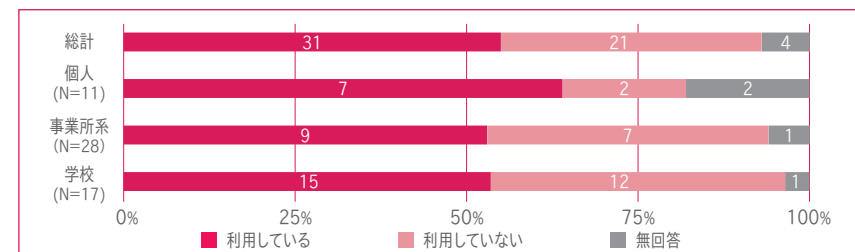
## (2) 指導者はどのような方ですか。(複数回答)



- 学校では必ずしも美術の教員だとは限らないことがわかる。
- 事業所系の回答数28件のうち、「指導者がいる」と答えたのは22件で78%になり、社会福祉施設職員が12名、美術のバックグラウンドをもつ社会福祉施設職員は2名、芸術家 (有償) 9名。
- その他としては、退職した元美術の先生や、音楽家、美術の心得のある地域の人などが含まれる。

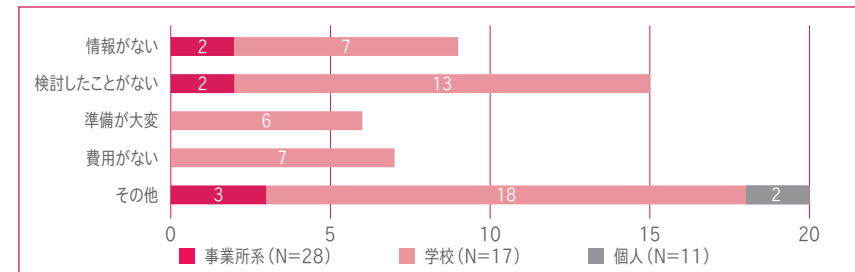
## 3. 発表の機会づくりについてお尋ねします。『調査・発掘、評価・発信 報告書』11-12ページより抜粋

## (2) 公募展などへの応募、またオーディションへの参加など社会的な評価をうける機会を利用したことはありますか。



- 「利用している」が学校で9件 (52%)、事業所で15件 (53%)。
- 「利用していない」が学校で7件 (41%)、事業所で12件 (42%)。

## (4) 社会的な評価をうける機会を利用していないのはどんな理由によるものですか。



- その他としては、職員が日々の業務に追われていて時間がない、作品が評価を受けるレベルに達していないと思われる、本人に出品する意欲がない、などの理由が含まれる。

※『調査・発掘、評価・発信 報告書』ではこのほか、II.自由記述 (13-16ページ)、III.アンケート原文掲載 (17-24ページ) を記載しています。



## 報告II. 訪問調査・発掘

どのような動機で  
表現は生まれ、その表現は  
どこに向かっているのか。

アンケート調査の内容をうけて、委員と事務局が、表現活動を行っている障害のある個人、団体、特別支援学校ならびに支援学級を抽出し、訪問調査を実施しました。訪問の際は、委員と事務局がチームを組み、多様な視点でその現場の環境や作家の状況を観察するように心がけました。またヒアリングの際は、アンケートでは読み取れなかったこと、自由筆記で気にかかったポイントなどへ詳細な質問を実施しました。

- 芸術文化活動への取り組みの概況（取り組みの有無、活動内容、活動場所、頻度）
- 活動の目的・動機・きっかけ
- 指導と支援（指導者の有無、活動の支援方法）
- 発表の機会（社会的評価をうける機会の有無、取り組み内容）

## report 01

芸術活動はどうしていいかわからない、だから大切  
特定非営利活動法人生活支援きょうどう舎

## しじゅうから at work

訪問日：2016年11月28日（月）

所在地：宮城県仙台市宮城野区

インタビューをうけてくれた方：中村周さん（施設長）、

木須健一さん（支援員）、熊谷さん（支援員）

JR東仙台駅から徒歩10分程度、マンション一階のフロアにある指定多機能型事業所（生活介護・就労継続支援B型）。朝のラジオ体操に始まり、ウォーキング、午後から箱折や封かんなどの軽作業を行います。その活動と並行してゆるやかに壁を仕切り、20人ほどの利用者が画材と画用紙を前におもいおもいに絵を描いていました。

「美術活動のきっかけは、実はリーマンショックです」と施設長の中村さん。内職仕事が激減し、何もやることがない、という現実から机の上でできることとして絵画活動がスタートしました。

一方、その支援方法にすぐに行き詰まったときに、職員が家族介護の中で「クリニカルアート」といわれる活動に出会い、以来、講師を招き、学校の授業以来、初めて絵を描く人たちに、貼り絵や色彩分割などの見通しのつく表現方法を伝え、ゆっくりと自分なりの方法で表現する様子を見守ってきたそうです。「内職と創作活動に意義のちがいを感じますか」と尋ねると、「内職作業があることは、わかりやすさ、数が見えるうえで大切です。一方、逆に絵を描くことはどうしていいかわからない、自由でいいということで難しい。しかし、だからこそ、自分で決めるという、もともとある力を引き出す機会をつくること、そして自由でいいということを確認することもまた必要で、それが大切であると今では考えています」と中村さんは応えてくれました。

作品は、友人と行った東京旅行の思い出である東京タワーやパフェ、生まれた秋田の風景や田沢湖の竜子姫像、旅行先の八幡平や紅葉の風景、大好きな電車などが描かれています。それぞれが自分なりのモチーフを持っており、これらは芸術活動が個人の自由を保障するというアトリエ全体の理解のうえに成り立っていると感じました。また紙で創作されたバッグ、紙粘土からつくられたお面など立体の作品にも眼がとまりました。一部の作品はグループホームの居室の中で生み出されているものだということでした。この法人が、もともと生活ホームを運営する目的で生まれ、利用者の生活支援をベースとしていること、そうした日常の表現の営みにも丁寧に向きあっている様子を感じることができました。

訪問したとき、しじゅうから at workでは初めてのグループ展「きょうどう舎それい展」（2016年12月1日～5日／ギャラリーチフリグリ・宮城野原）の準備をしていました。きっかけはArt to You! 東北障がい者芸術公募展で、入選者の作品をみに行った時のこと。「普段は、ほかの人をほめること、共感が少ない利用者同士が、展示会をみて圧倒されたときに、すごいなあと感じたのです。他者を認める、そのような機会をつくる必要性もあると考え、全員で展示会をすることにしました」と再び中村さん。みせていただいたオリジナルカレンダーも全員の作品が掲載され、また入選率7%という全国障害者アート公募展「みんな北斎」にも2名が入選し、これからの活動が楽しみなアトリエです。（文：柴崎由美子）

## report 09

## 2年前から制作再開、作品発表へも意欲的

## 浅野春香さん

訪問日：2017年1月11日（水） 居住地：宮城県仙台市泉区

インタビューをうけてくれた方：浅野春香さん

（みやぎNPOプラザに来訪）

土・日曜を除くほぼ毎日、絵画の制作を自宅で行っているという浅野春香さん。中学・高校で美術部に所属し、大学では生活美術を専攻しました。大学時代は絵画、彫刻、工芸などに挑戦し、立体作品をつくることもあったといいますが、現在は場所や道具の関係もあって、絵画作品に集中。また環境が整えば、立体作品や陶芸、木工などもつくってみたいですよと応えました。普段は自宅の机で、集中力が切れるまで3時間ほど描くそうですが、宮城県美術館の創作室を利用したり、近所のカフェで描くこともあるそう。また身体を使うワークショップにも参加経験があります。それに加えて、多夢多夢舎中山工房の美術の時間に月2、3回ほど参加して、描き方を習っています。

大学卒業後、病状が重くなったため療養生活を送っていた浅野さん。その後結婚を経て、仕事を辞めて、時間ができたことがきっかけとなり、作品制作を再開しました。主なモチーフは自然や動物が多く、使用する画材はボールペンがメインで、用紙はケント紙を用いることが多いそうです。特徴的な細かいタッチは、制作を再開した2年前からのもの。黒だけを使うときもあれば、黒、赤、青の三色を用いるときもあります。ペンで描いて、色鉛筆で彩画することもあり、そのときに使用する色合いが最近カラフルになってきたといいます。「完成形のイメージに近づけていくのではなくて、描きながらどんどん考えていきます」とご自身の制作について解説してくださいました。

はじめて作品を応募したのは仙台市のコンテスト。それから、Art to You! 東北障がい者芸術公募展の募集要項を見つけ応募、第2回のArt to You! では、「ジャガモー」で大賞・東洋ワーク賞を受賞しました。「受賞して嬉しいけど緊張しました（笑）。これがきっかけでモチベーションがあがって、ほかの賞にも応募したけれど、それは駄目だったので、難しいなと思いました。これからもArt to You! への応募は続けたいです」と振り返り、第3回の公募に向けて制作を行っているといいます。

現在浅野さんが興味があるのは油絵。高校の美術部と大学のと

きに習っていましたが、道具と場所の関係でいまは描くチャンスがありません。しかし、大きい油絵を描きたいという目標があり、多夢多夢舎からもやってみませんかと声をかけられたそうです。これまでに、障がい者支援活動Paralym Art（パラリンアート）に登録したことがきっかけで、2015年の秋から冬にかけて、東京の東急プラザ銀座の壁面を飾るタイルの絵を手がけるなど、何度か企業などとの仕事の経験がある浅野さん。商品化の話がある場合、すごく緊張してしまうので、その緊張を解くのにある程度時間がかかるそうです。以前、ある商品に関してオーダーがあった際は、3カ月時間をいただき、そのあいだに10枚の作品を仕上げました。時間をいただければ、何案か描いて提出できますといえます。

Art to You! 受賞の副賞として、仙台市のギャラリー・晩翠画廊で2017年7月に個展の開催が決まっています。いまは、それに向けて象をモチーフにした童話を制作している真っ最中。これまでに自分の作品を販売したことはなく、7月の個展でも販売を行うかどうか検討しており、作品を手放すことや価格設定への葛藤、迷いがあると教えてくれました。（文：高橋創一）

※訪問調査・発掘レポートは『調査・発掘、評価・発信 報告書』27-38ページに掲載。  
●report01-04 福祉施設（4カ所）  
●report05-09 障害のあるアーティスト（5人）  
●report10 学校（3カ所）

※＜報告III. 評価・発信～SOUNPが提案する、障害のある人の芸術活動の評価と発信とは。＞を、『調査・発掘、評価・発信 報告書』40-52ページに掲載。

## 提案

障害のある人の芸術活動支援  
その価値と未来

SOUPは2014年から3年間、障害者の芸術活動支援モデル事業を推進してきました。ここでは、この3年間の取り組み、ならびに2016年度に実施した調査・発掘、評価・発信事業から、何を価値ととらえ、どのような仕組みやプログラムを整備すべきか提案します。また、『調査・発掘、評価・発信 報告書』の59-61ページにはもう一つの提案も掲載しています。

アートをする「環境」に着目して拡げる  
障害者の生活・人生の質

## 鈴木理恵子

女子美術大学准教授／アートミーツケア学会理事

ほんの数年前まで、芸術の「大河」と福祉の「大川」は互いに遙か彼方に流れていると思われていました。しかし、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定を機に「社会包摂」「障害者の芸術文化振興」の風が吹き始めたことで、二つの川が合流する瞬間に、わたしたちは立ち会うことになりました。芸術の大河には完成した「作品の質」が高く評価される「作品・中心主義」が流れています。福祉の大川に流れるのは障害者の長い年月に渡る「生活の質」、つまり生活環境の質の向上と、その結果が本人だけでなく家族や周囲の人にもたらす影響を重視する「人・中心主義」です。では、障害者の生活・人生が真に豊かになるにはその合流点をどのように考えるべきなのでしょう。

アートをする（芸術文化活動）「環境」（場所、時間、支援者、つながり）に着目した本プロジェクトの丁寧な訪問調査により、その考え方の一つを導くことができました。一般にアートをする自体は、情操教育やアートセラピーでよく知られるように本人の心を癒し、気持ちを表出しやすくし、レクリエーションや趣味ともなりますが、それらとは全く別の観点です。

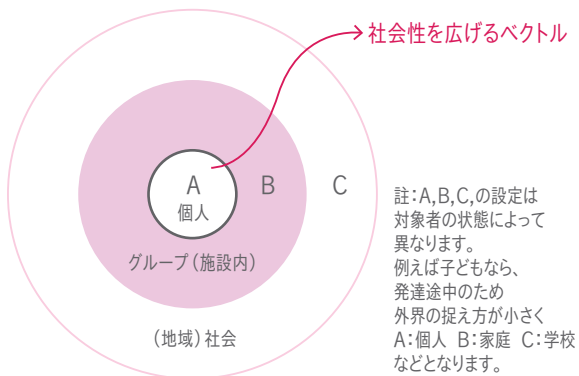
まず、ソーシャル・ウェルビーングとは何かに触れた後、アートをする環境の質の向上の観点からみて優れている二つの事例を挙げ、気をつける二つのポイントを導きます。最後に、そこから

実現可能にするための提案をします。

## アートをする「環境」を整えることで得られる

## 障害者の社会的充実

なぜ、アートをする「環境」に着目すべきなのでしょう。「世界人権宣言」には「すべての人は、“自由に社会の文化生活に参加し、芸術を鑑賞し、”及び科学の進歩と“その恩恵とにあずかる権利”を有する。」（第27条第1項）とあり、「世界保健機関憲章」では「健康」とは「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして“社会的にも、すべてが満たされた状態”にあること」と定義されています（“”は筆者による）。つまり、障害の有無に関わらず、自由に芸術を制作・鑑賞する中で、「社会的に充実した状態（原文：social well-being）」を得ることは万人の権利なのです。「社会的に充実した状態」とは、自分自身や家庭内等だけに閉じ込まることなく、新しい人や物事との出会いやつながりを拡げようとする状態です。それを作り出す原動力は目標をもって外に向かって挑戦する態度です。訪問調査の数多くのエピソードをソーシャル・ウェルビーング・サークルと名付けた筆者考案の図（下図）に当てはめると、サークルが徐々に拡がっていることや障害者の社会性の扉が開かれたことが確認できました。



図：ソーシャル・ウェルビーング・サークル

二つの好例を紹介します。浅野春香さんは精神的な障害を抱えながらも（本報告書53ページ）自宅での絵画制作を続け（図中のA）、市内の多夢多夢舎中山工房で学び、自ら複数の公募展に応募し（図中のB）、そこでの受賞をきっかけに企業からの依頼で東急プラザ（東京都内）の壁画を手がけるまでになりました（図中のC）。この事例からは浅野さんが自分のペースを保ったまま、社会との関わりを広げていく様が見えてきます。彼

女の原動力は大きな油絵を描きたいという目標であり、多夢多夢舎とのつながりがそれを支えていると言えます。

特定非営利活動法人「生活支援きょうどう舎しじゅうから at work」（本報告書52ページ）では、当初、利用者たちが自分自身で内容を自由に決定する個人でのアート活動（図中のA）をしていました。公募展の入選作品の展示において、利用者が他者の作品を認めて賞賛する気持ちを持ったり、利用者同士が共感し合ったりしていることに支援者が気づいたことがきっかけとなり、複数の利用者の作品によるカレンダーを制作したり（図中のB）、公募展に応募しています（図中のC）。この事例では施設の内側から外向きのベクトルを作り出すことが意識されるようになってきたのが分かります。

これらをイギリスの新経済財団（New Economics Foundation）が2008年に発表した指標「よりよく生きるための5つの方法」（原題：Five ways to well-being<sup>[\*]</sup>）で紹介された「気づく」「つながる」「行動する」「与える」「学び続ける」をキーワードとして再評価したところ、「（他者に賞賛の言葉を）与える」「（新しい工房と）つながる」「（賞への応募など）行動する」「（つくり）学び続ける」など、インタビュー内の数多くの事例が該当しています。この指標からも社会的な充実を得ていることが明らかです。本人や支援者がアートをする「環境」を整えていくことで、障害に関わらず誰もが当たり前保障されるべき人権や健康が守られ、社会的に充実した状態になる可能性があるのです。

## 気をつける二つのポイント

今回の訪問調査から障害者の社会生活を充実させるために気をつける二つのポイントが明らかになりました。一つ目は、芸術文化の情報と福祉サービスの情報を一カ所で提供することです。例えば、これからアート活動を初めたいと希望している移動介助が必要な人は、障害者を受け入れるアトリエの情報だけではなく移動介助や生活支援の情報の両方を組み合わせることで、初めて実際にアトリエに通えるようになります。二つ目は、アートをするのが障害者の社会的な充実度を高め得ることを行政・企業・福祉施設・家族などの支援者達が理解することです。先のNPO法人「生活支援きょうどう舎しじゅうから at work」の例では、福祉施設の職員のアート活動の方針の転換によって利用者の社会性を育てる外向きのベクトルを引き出していまし

た。この理解を進めるには多くの支援者に具体的な方法を伝える機会が必要になります。

## 障害者がアートをすることを実現可能にするための提案

障害者がアートを始めてみたいと思っても、自分の状態に合うように情報を集めて組み合わせることは想像以上に難しいかもしれません。そこで、芸術文化と福祉の情報の両方を提供できる、地域に密着したNPOなどによるストーリーライブラリーの開設を提案します。既にアートをすることで社会との関係をつくっている人たちから具体的な情報を含む体験談を集めましょう。自室で長年コツコツ作っていた作品を東京の美術館に展示するまでになったシンデレラストーリー、息子が描いた絵が地元商店街の包装紙になった身近なストーリー、失敗ストーリーなど、参考になるアートをする環境の種と知恵が散りばめられています。そして、障害のある本人、家族や福祉施設の職員などにストーリーライブラリーの活用を勧めます。多くのストーリーを読むうちに、アートを「する」ことによる社会包摂の考え方や方法についての理解が自然に進むでしょう。アートを「する」こと自体を起点にして、社会とつながって人生を充実させようと希望が持てるようになります。

## さいごに、大切なこと

アートをする環境を整えることと同じくらい大切な要素があります。それは「勇気」です。この要素は、訪問調査の結果に文字としては表れていませんでしたが、その行間に感じ取ることができます。例えば、アートを始めてみる勇気、公募展に応募する勇気、落選しても立ち直りアートをし続ける勇気など、本人、家族や福祉施設の職員の勇気が社会への外向きのベクトルを作り出す「原動力の素（もと）」になっています。その勇気を支えることも環境の一部として当たり前になった時、社会包摂が実現できる社会と言えるのではないのでしょうか。

今回の提案は、世界人権宣言や世界保険機関憲章に基づいています。そのため、障害者だけでなく、孤立する高齢者・外国人など、今まで一般社会や芸術文化につながりにくかった人々にも応用できる可能性を含んでいます。そして結果的には、彼らの「アートの裾野を広げ」「優れた才能を伸ばす」その両方を緩やかに導くことになるでしょう。芸術と福祉の合流が進むことで、今後、新たに作成されるシステムや評価方法が血の通った温もりのあるものになることを期待しています。

\*参考：http://www.neweconomics.org/projects/entry/five-ways-to-well-being



## SOUP 2016年度 活動実績

### 協 2016（平成28）年度 第1回 協力委員会

2016年6月30日／東京エレクトロンホール宮城 5階 503教養室／参加者10人  
平成27年度障害者の芸術活動支援モデル事業の事業報告、平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業の事業計画について、意見交換、等。

### 調 2016（平成28）年度 第1回 調査・発掘、評価・発信委員会

2016年7月25日／仙台市市民活動サポートセンター／参加者8人  
今年度より採択を受けた調査・発掘、評価・発信事業の事業計画について、評価の指針について意見交換、等。

### 育 まっくらで音あそび

2016年9月10日／宮城県障害者福祉センター2階 日常生活訓練室2／参加者9人／講師：山路智恵子  
宮城県障害者福祉センター主催の「まっくらカフェ」を会場に、身近な道具を使った音のワークショップを行った。  
まっくらの中できく音や鳴らす音は五感や即興性をひきだし、音の力が際立つことを一層感じることができる体験となった。

### 育 一緒に見つける可能性 ―それぞれの表現と創造力を開花させる支援方法と必要性

2016年9月29日／社会福祉法人なのはな会はまなす苑・はまゆう／参加者13人／講師：ライラ・カセム  
仙台市にある生活介護事業所はまなす苑の表現活動の現場を訪問後、同法人事業所はまゆうへ移動し、ファシリテーターより、東京の福祉施設とともに行ったプロジェクト「entente」についてお話をいただき、参加者でディスカッションを行った。

### 育 表現するところ・からだを育てるダンスと音楽編@仙台

2016年10月12日／日立システムズホール仙台 練習室1、台原森林公園／参加者14人／講師：里見まり子、山路智恵子  
即興ダンスと音楽のワークショップ。公園をめぐり、まわりのものや人と関わりながら、五感を使い匂いや音や色を感じ、即興ダンスや音で表現につなげる試みを行った。

### 育 表現するところ・からだを育てるダンスと音楽編@栗原

2016年10月19日／風の沢ミュージアム／参加者21人／講師：里見まり子、山路智恵子  
即興ダンスと音楽のワークショップ。音に耳を澄まし仲間を感じて身体を動かしたり、里山をめぐりながら、風や光、自然の匂いや音や色を感じ、即興ダンスや音で表現につなげる試みを行った。

### 育 みつける／つなげるワークショップ「ふうけいときおくを描く」

2016年10月24～25日／医療法人財団姉歯松風会栗原市東部地域活動支援センターたんぼぼ／参加者11人／講師：瀬尾夏美  
「くりのはらのアート展」での展示に向けて、福祉施設にアーティストが入り2日間にわたって絵を描いたワークショップ。  
1日目は栗原の秋の風景を手分けして描き、2日目は各々が選んだ写真を描いた。

### 育 みつける／つなげるワークショップ「いろと遊ぶ」

2016年10月27日／社会福祉法人栗原秀峰会障害福祉サービス事業所すぶりんぐ／参加者20人／講師：土屋麻美  
「くりのはらのアート展」での展示に向けて、福祉施設にアーティストが入り共同制作を行った。たっぶりの絵の具と遊ぶように、大きな布に色を塗るなどした。  
出来上がった布は、さをり織りの名残系たちとともに、「くりのはらのアート展」会場の里山に編み込むように参加者が飾った。

### 調 2016（平成28）年度 第2回 調査・発掘、評価・発信委員会

2016年10月27日／仙台市市民活動サポートセンター 3階 研修室2／参加者8人  
事業の中間報告、作品の選定、今後の事業内容について、意見交換、等。

●…モデル事業の要綱で必須とされているプログラム ■…SOUPのオリジナルプログラム

協…協力委員会 相…相談支援事業 相…相談支援研究会 著…人材育成のための研修（ア）著作権等の権利保護に関する研修 育 育…人材育成のための研修（イ）障害者へ  
展…参加型展示会の開催・関係者のネットワーク 展…参加型展示会のイベント 調…調査・発掘、評価・発信

### 展 みつける／つなげるワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@くりのはら①

2016年10月30日／風の沢ミュージアム／参加者25人／講師：中村紋子  
オーダー服の仮縫いに利用されるトワルをキャンバスとして捉え、参加者に自由に絵を描いてもらうワークショップ。作品は「くりのはらのアート展」で展示。

### 展 くりのはらのアート展 みつける／つなげる オープニングセレモニー&ギャラリーツアー

2016年11月5日／風の沢ミュージアム／参加者34人／講師：齋正弘、里見まり子、山路智恵子  
「くりのはらのアート展」オープニングとして、即興ダンスと音楽のワークショップを行ったほか、学芸員をお招きし展示作品の鑑賞会も行った。

### 展 くりのはらのアート展 みつける／つなげる

2016年11月5～27日／風の沢ミュージアム／来場者262人／出展作家4人・団体2カ所／出展作品76点  
障害のある人や市民、アーティストが参加して行うワークショップで生まれた作品を、古民家を生かした現代美術館風の沢ミュージアムにて展示会を行った。

### 展 めぐるみやぎのアート展関連企画 ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@くりのはら②

2016年11月12日／風の沢ミュージアム／参加者21人／講師：中村紋子、多夢多夢舎中山工房  
「くりのはらのアート展」の来場者や、栗原市、仙台市などの参加者が交流。最後に完成した服を着て写真撮影会。

### 展 やまのものとアート展 ふっ・こう・ふく

2016年11月15日～12月11日／NPO法人ボラリス・『こう・ふく』アトリエ／来場者683人／  
出展作家1人・壁画制作20人／出展作品15点  
ボラリスを代表するアーティスト牧稔さんの人生にスポットをあてた個展。  
関連企画として、地元企業からの依頼でボラリスが地域の住民と制作に関わった壁画「HAPPYやまのものと」紹介パネルを展示。

### 展 いしのまきのアート展 コラボノカタチ

2016年11月19日～12月25日／ペンギンズギャラリー／来場者100人／  
出展作家12人・大学生5人／出展作品19点  
石巻の障害のあるアーティストとデザイナー、テキスタイルを学ぶ学生などが協働でつくる作品の展示会。

### 展 めぐるみやぎのアート展関連企画 ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@やまのもと

2016年11月24日／合戦原学堂／参加者32人／講師：中村紋子、多夢多夢舎中山工房  
「やまのものとアート展」来場者や山元町、仙台市などの参加者で交流。最後に完成した服を着て写真撮影会。

### 相 相談支援研究会 教育分野連携編

2016年11月24日／みやぎNPOプラザ 第2会議室／参加者9人 ※非公開  
実際の相談内容とその対応状況について事例を紹介し検証した。教育関係者、行政が集まり、相談ニーズの広がり、地域による資源格差などの課題を共有。  
モデル事業連携事務局による滋賀県における、教育と福祉の連携事例の情報交換等。

### 展 めぐるみやぎのアート展関連企画 ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@いしのまき

2016年11月26日／共生型福祉施設織音／参加者24人／講師：中村紋子、多夢多夢舎中山工房  
「いしのまきのアート展」来場者や石巻市、仙台市などの参加者で交流。最後に完成した服を着て写真撮影会。

の美術活動の支援方法に関する研修 (i) 関心層を掘りおこしていくためのワークショップ型研修 (ii) 参加型展示会に向けた実践研修 (iii) 活動実績のある人たちのステップアップ研修

## 展 調査・発掘、評価・発信事業 第1回訪問調査

2016年11月28日／仙台市、大和町／訪問者3人  
福祉施設2カ所、個人1名、計3カ所訪問。

## 展 ダンスパフォーマンス「HAPPYやまのもと ～ダンスでHAPPY～」

2016年12月4日／フレスコキョクチ山下駅前店壁画前／参加者180人  
壁画「HAPPYやまのもと」の完成と駅の再開をお祝いするイベントとしてダンスパフォーマンスを開催。  
町内の民俗芸能団体有志と仙台、オーストラリアのアートNPOが参加。

## 育 表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台

2016年12月7日／コニカミノルタジャパン株式会社 東北支店／参加者34人／講師：スティーブ・メイヤーミラー、ブレンデン・ボレリーニ  
みえない・きこえないとき、人はどのように世界を感じ、何を写真におさめようとするのかを参加者とディスカッションし、カメラを通して一緒に体験した。  
撮影した写真は立体コピー写真として出力し、凹凸を触って鑑賞した。

## 育 振り返り&語り場：みつける／つなげる語り場

2016年12月21日／医療法人財団姉齒松風会栗原市東部地域活動支援センターたんぼ／参加者10人／講師：齋正弘  
「みつける／つなげるワークショップ」に参加した福祉施設スタッフと専門家が参加。  
「くりのはらのアート展」の振り返り、これからの表現活動の可能性などについて語りあう場とした。

## 調 2016（平成28）年度 第3回 調査・発掘、評価・発信委員会

2017年1月5日／仙台市市民活動サポートセンター 3階 研修室2／参加者8人  
訪問調査、アンケート調査の報告、webサイト掲載作品の選定、今後の事業内容について、意見交換、等。

## 調 調査・発掘、評価・発信事業 第2回訪問調査

2017年1月6日／岩沼市、亘理町／訪問者3人  
福祉施設1カ所、個人2名、計3カ所訪問。

## 調 調査・発掘、評価・発信事業 第3回訪問調査

2017年1月11日／仙台市／訪問者3人  
福祉施設1カ所、個人2名、計3カ所訪問。

## 展 凹凸写真展「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES ―誰かの靴を履いて歩く―

2017年1月6～30日／ニコプラザ仙台／来場者650人  
「表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台」で行ったワークショップの参加者による立体コピーによる凹凸写真展。

## 展 宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会 SOUPのレシピ展 10の事例、100のキーワード

2017年1月28～30日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／来場者1360人／出展作家3人・プロジェクト数2／出展作品37点  
「めぐるみやぎのアート展」報告展示、SOUPの3年間の活動の中で、つながった人、生まれたモノ、コトをレシピとして  
10の事例と100のキーワードをテキストと作品や関連するモノ、写真、映像などで展示。

## 展 表現するところからだを育てる音楽編 公開ワークショップ

2017年1月28日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／参加者23人／講師：山路智恵子  
音に耳を澄まし、場や仲間を感じながら音で遊ぶ、即興音楽のワークショップ。

●…モデル事業の要綱で必須とされているプログラム ■…SOUPのオリジナルプログラム

協…協力委員会 相…相談支援事業 相…相談支援研究会 著…人材育成のための研修（ア）著作権等の権利保護に関する研修 育 育…人材育成のための研修（イ）障害者へ  
展…参加型展示会の開催・関係者のネットワーク 展…参加型展示会のイベント 調…調査・発掘、評価・発信

## 展 宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会 SOUPのレシピ展 10の事例、100のキーワード関連イベント SOUP 2016 実践報告会

2017年1月28日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／参加者72人／コメンテーター：齋正弘、アイハラケンジ  
山元町、石巻市、栗原市で開催した「めぐるみやぎのアート展」や、SOUPの人材育成研修2016で行われてきた各地での実践を通してみてきた成果や課題などを語りあった。

## 展 SOUP交流会

2017年1月28日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／参加者30人  
宮城県内のさまざまな作家たちや関係者が集まり交流会を行った。

## 調 調査・発掘、評価・発信事業 第4回訪問調査

2017年2月2日／仙台市／訪問者3人  
特別支援学校、計1カ所訪問。

## 育 美術と手話プロジェクト@宮城

2017年2月4日／宮城県美術館／参加者32人／講師：齋正弘、美術と手話プロジェクト  
きこえない人・きこえにくい人・きこえる人が参加し、宮城県美術館で手話を使い美術鑑賞を行った。  
東京で活動するチームと、山形、宮城の参加者が情報交換を行い、美術鑑賞を考える機会となった。

## 調 調査・発掘、評価・発信事業 第5回訪問調査

2017年2月6日／石巻市、女川町／訪問者4人  
高等学園、特別支援学級、計2カ所訪問。

## 著 アートと著作権研修 基本編

2017年2月16日／みやぎNPOプラザ 第1会議室／参加者18人／講師：辻哲哉  
表現活動とともに生まれる権利＝「著作権」。障害のあるなしに関わらず、すべての人に共通した権利である著作権を自分のこととして考える内容とした。

## 著 アートと著作権研修 応用編

2017年3月2日／みやぎNPOプラザ 第1会議室／参加者16人／講師：辻哲哉  
事例を元に権利の考え方、生かし方を学ぶ内容とした。障害のある人によりそう支援者が正しい知識を持つことで、権利を守りながら障害のある人の  
表現の可能性を伸ばすことができる、ということを研修を通して参加者と確認した。

## 相 協 相談支援研究会芸術分野連携編／2016（平成28）年度 第2回協力委員会

2017年3月13日／仙台市市民活動サポートセンター 研修室5／参加者9人  
実際の相談内容とその対応状況について事例を紹介し検証した。宮城県内のアーティストの契約、寄贈に関わる課題等を議論。  
平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業の報告、今後の事業計画について、意見交換、等。

## 育 障害のある人の芸術文化支援 ステップアップ研修

2017年3月23日／みやぎNPOプラザ 第2会議室／参加者11人／講師：田口ひろみ、アイハラケンジ、柴崎由美子  
芸術文化に関わる協力者探し、材料・道具や展示会開催のための資金調達、活動の広報、組織化のためのスキルを学ぶ内容とした。

の美術活動の支援方法に関する研修（i）関心層を掘りおこしていくためのワークショップ型研修（ii）参加型展示会に向けた実践研修（iii）活動実績のある人たちのステップアップ研修



## 宮城の作家紹介

2017年度に実施した「調査・発掘、評価・発信」事業では「作家・作品調査」として、あらかじめwebサイトなどで公開することを前提とし、自薦他薦に限らず情報を集め、合計48人から資料を得ました。調査・発掘、評価・発信委員会では、作家・作品・活動の評価を実施し、最終的に22人の作家を選定しました。その評価の視点は、1.現代アート（作品・表現の評価）、2.作品の売買（美術市場等）、3.二次利用（商用利用等）、4.環境、です。原画を集荷し、作品を撮影・スキャンしてデジタルデータを作成、また創作活動のきっかけ、様子、発表履歴を集め、それを編集してプロフィールを作成しました。これらは、あわせてwebサイトで公開しています。

**宮城の作家紹介ページ** <http://soup.ableart.org/artist/>

2016年度に開設（SOUP webサイトは2014年度に開設）

### 【宮城の作家 一覧ページ】

絵画、ドローイング、描画、イラストレーション、立体作品などが集まりました。22人の作家の名前とアイコンを表示、ここをクリックすると作家の個別紹介ページが表示されます。この資料を通して、作家の活躍の機会が広がることを願っています。



### 【作家 個別紹介ページ】

右側にある小さな作品のアイコンをクリックすると、左側に大きく作品が表示されます。タイトル、サイズ、画材、制作年を表示しています。作家を知る手がかりにしてほしい。その思いで、創作活動のきっかけや様子、発表履歴を集め、それらを編集してプロフィールを作成しました。





## 協力委員、講師／ファシリテーター／調査・発掘、評価・発信委員、東北・東京事務局スタッフ一覧

障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城では、事業の立案・運営・広報と事業の評価をとともに実施する協力委員会と調査・発掘、評価・発信事業を担当する委員会を設置しました。ワークショップや研修会では、多くの専門家にご協力をいただきました。（所属・職名は2017年3月31日現在）

### 協力委員

敬称略・50音順

伊藤清市（とっておきの音楽祭実行委員会SENDAI 実行委員長）

甲斐賢治（せんだいメディアテーク アーティストティックディレクター）

風見正三（宮城大学事業構想学部 教授）

上林 佑（弁護士）

菊地竜生（仙台市市民活動サポートセンター センター長）

古山周太郎（東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科 准教授）

齋 正弘（宮城県美術館教育普及部 学芸員）

佐藤謙一（宮城県保健福祉部障害福祉課 参事兼課長）

里見まり子（宮城教育大学教育学部 教授）

関口怜子（公益財団法人宮城県文化振興財団 理事）

日野和典（宮城県環境生活部 消費生活・文化課長）

松田道雄（尚絅学院大学エクステンションセンター 特任教授）

八巻寿文（せんだい3.11メモリアル交流館 館長）

### 講師／ファシリテーター／調査・発掘、評価・発信委員

敬称略・50音順

### アイハラケンジ

山形県山形市／宮城県仙台市

アートディレクター／東北芸術工科大学准教授

株式会社アイケン代表／halken LLP共同主宰

1974年東京都生まれ、仙台市育ち。東北芸術工科大学卒業、同大学院修了。クリエイティブディレクション・アートディレクションを専門として、様々な企業や団体の活動をクリエイティブの方面からサポートしている。2012年より、halken LLPを共同主宰し、アートブックの企画・出版、展覧会のキュレーションを行っている。2014年からは、東北芸術工科大学で後進の育成にも従事。

### 薄井真矢

（うすい・まや） 宮城県

せんだいメディアテーク学芸員（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）

宮城県仙台市生まれ。1999年からせんだいメディアテークで現代美術の企画や、市民団体との協働事業、活動支援に携わる。当館バリアフリー専門スタッフと行った主な展覧会は

「Dialog in the Dark in仙台」（2001年）、「光島貴之『音と触覚で生活世界をなぞる』（2010年）。アート・ミーツ・ケア学会仙台会場担当。アーティストが地域の人々の力をひきだしながら一緒に企画を立ちあげていく現場に興味がある。近年は地域調査をもとにした美術家伊達伸明氏によるプロジェクト「亜炭香古学～足元の仙台を掘り起こす」を担当。

### 風の沢ミュージアム

宮城県栗原市

体験型複合施設

築200年ほどの古民家を改装し、2011年から現代美術館、ギャラリー、カフェ、ショップ、里山公園からなる体験型複合施設として運営。これまでの主な展示に「おかさき乾じろPOST／UMUM＝OCT／OPUS展」（2016年）など。また、芸術への関心を深め、里山暮らしの豊かさを普及することを目的に、特定非営利活動法人帰園田居創生機構を2013年に立ちあげた。

### クロスロードアーツ

オーストラリア・マッカイ市

コミュニティアート団体  
障害のある人をはじめさまざまな人たちがともに、演劇、音楽、ダンス、絵画、人形劇、彫刻、写真、映像などの活動を行っている。

### スティーブ・メイヤーミラー

（Steve Mayer-Miller）

クロスロードアーツ芸術監督・CEO

オーストラリア、インド、日本、アジア太平洋地域の幅広い地域社会と協力して、地域芸術や文化開発に35年ほど関わっている。

### ブレンデン・ボレリーニ

（Brenden Borellini）

写真家／クロスロードアーツ・メンバー

視覚および聴覚に障害があるが、クロスロードアーツのスタッフ、メンバーの力をかりながら写真作品を制作している。カメラをとおして全身で世界をまなざし、写真をとおしてさまざまな人たちとつながっている。

### 古山周太郎

（こやま・しゅうたろう） 宮城県仙台市／岩手県住田町

東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科

准教授／一般社団法人邑サポート理事

東京工業大学大学院情報理工学研究科博士課程卒業。専攻はコミュニティデザイン。障がいをもつ方の住まいの調査や、中山間地域の持続的居住のありかたの調査研究に関わる。東日本大震災後には、大学時代の友人や後輩4名と社団法人を設立、住田町で仮設住宅のコミュニティ支援や地域づくり活動を実践している。

### 齋 正弘

（さい・まさひろ） 宮城県仙台市

宮城県美術館教育普及部 学芸員

1951年宮城県生まれ。1979年より宮城県美術館の建設と運営に教育担当学芸員として関わる。2007年宮城県美術館教育普及部長。2011年定年退職。美術館勤務中は公立美術館の美術館教育と美術教育の研究と実践に携わり、主に、年少／年長者や障害を持つ人達との美術を通した教育的な活動について経験が深い。

### 里見まり子

（さとみ・まりこ） 宮城県仙台市

即興舞踊家／宮城教育大学特任教授

東京教育大学卒業後ドイツに留学。ドイツ・ケルン体育大学で即興ダンス、身体表現を学ぶ。帰国後、宮城教育大学に勤務。身体表現、ダンス、体操などの授業を担当。障害の有無を問わず市民を対象とするワークショップ等にも力を入れている。即興舞踊家としても国内外で活動。

### 鈴木理恵子

（すずき・りえこ） 東京都／神奈川県

女子美術大学准教授／アートミーツケア学会理事

横浜出身。女子美術大学卒業、東京藝術大学大学院修了。環境デザイナーを経て渡英。2007年バーミンガム・シティ大学大学院 MA Art, Health and Well-being修了。専門はアートアクティビティによる社会包摂。病児、重症心身／聴覚障害者、子育て中の母などとの〈芸術と医療福祉〉のあり方を提案している。公益財団法人かながわ国際交流財団社会教育文化施設間連携事業運営委員。

### 瀬尾夏美

（せお・なつみ） 宮城県仙台市

画家／作家

1988年東京生まれ。土地の人びとのことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2012年より岩手県陸前高田市に拠点を移し、地域の中でワークショップや対話の場を運営。2015年仙台市で、土地との協働を通した記録活動を行う一般社団法人NOOKを立ちあげる。

### 高橋創一

（たかはし・そういち） 宮城県

編集者／ライター／その他

1986年宮城県気仙沼市生まれ。大学卒業後、編集プロダクション勤務などを経て、現在フリーランス。仙台市内の文化施設や企業、NPO法人などの広報物、報告書や書籍の編集、構成を主に手掛けている。出版の意図を共有し、内容と形態がともにみあっている書籍／冊子づくりを行うことが本懐。

**田口ひろみ**（たぐち・ひろみ） 宮城県亘理郡山元町

特定非営利活動法人ボラリス代表理事

1998年～山元町社会福祉協議会が運営する障害者施設「工房地球村」指導員、2008年～施設長。東日本大震災後、全国の精神科や障害者支援の団体、地域ボランティアと連携して工房地球村を再開。2011年「いちごものがたりプロジェクト」、2012年「カフェ地球村プロジェクト」を企画実施し、震災で仕事の3分の2を失った施設の活動の立て直しを行った。2015年5月、「特定非営利活動法人ボラリス」を設立し代表理事となる。「障害を持つ人も持たない人もともに素敵に生き、はたらせるまちづくり」をめざす。

**辻 哲哉**（つじ・てつや） 東京都

弁護士／Field-R法律事務所

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン理事

障害者芸術著作権等整備委員会編『人権の視点から考える 障害者アートと著作権』（日本障害者芸術文化協会／2000年）の編著に参加。障害のある人のアートを仕事につなげるエイブルアート・カンパニーの著作権の実務を支援している。

**中村紋子**（なかむら・あやこ） 東京近辺

美術家

写真と絵をメインに作品を制作し国内外で発表している。作品には写真集『Silence』（リブロアルテ／2011年）、『潮目』（ポット出版／2014年）、日本のサラリーマンをテーマにしたグラフィックシリーズ“USALYMAN”等。好きなものはアイス。特技は電波ですてきな芸術家を発見すること。

**美術と手話プロジェクト** 東京都

ファシリテーターチーム

2011年からエイブル・アート・ジャパンを拠点に、「美術」「美術館」「手話」「きこえない人」というキーワードに関心を持つ人たちが緩やかに集まり、自由に議論したり、意見を出しあい、これらの課題に取り組む活動をはじめている。美術や美術館がきこえない人、きこえにくい人をはじめすべての人にとって、より身近で開かれたものとなるようにすることを目的として活動をしている。

**三浦晴子**（みうら・はるこ） 山形県山形市

フォトグラファー／キュレーター／halken LLP共同主宰

秋田県秋田市生まれ。東北芸術工科大学卒業、同大学院修了。フォトグラファーとして活動する傍ら、halken LLP共同主宰。主なキュレーションとして、2010年「スガノサカエ図画展 Hello Everybody!」（十和田市現代美術館）、山形ビエンナーレ2014「スガノサカエ図画展 山をなぞる」（やまがた藝術学舎）、山形ビエンナーレ2016「スガノサカエ図画展 安息のポーズ」（山形県文翔館）、2017年「TOCHKA Playground!」（山形県東根市・まなびあテラス）など。

**山路智恵子**（やまじ・ちえこ） 宮城県仙台市

即興音楽家

2001年より仙台の音楽グループyumboにドラムで参加。他では日用品を用いて即興演奏を行った。うどん打ちを演奏として捉え神戸の即興演奏グループ音遊びの会へうどん打ちでも参加した。

**ライラ・カセム**（Laila Cassim） 東京都

グラフィックデザイナー／東京大学先端研究センター特任助教

知的障がいの成人が通う障がい者福祉施設「綾瀬ひまわり園」で定期的にアート指導をしている。デザイナーとしての専門性を生かし、施設の支援スタッフとともに、利用者の社会参加と経済自立につながるアート作品とその作品をもとにした持続可能な仕組みとデザイン商品の制作・開発に取り組んでいる。

**東北・東京事務局スタッフ**

**青木ユカリ**（あおき・ゆかり） 宮城県

特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター常務理事・事務局長／特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局プロジェクトスタッフ

宮城県仙台市生まれ。地元企業へ就職後、1996年に市民活動支援システム研究会の調査に関わったことをきっかけに、1998年から10年間中間支援組織のスタッフとして従事。2008年岩手・宮城内陸地震の際には、被災地の情報収集・支援活動に携わり、記録誌『山が動いた』の編集等に協力。東日本大震災後は、被災地で復興支援に関わるプロジェクトに参加。市民活動団体・NPO支援、まちづくり支援を主に活動中。

**佐々木えりな**（ささき・えりな） 宮城県

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

エイブルアート・カンパニー東北事務局プロジェクトスタッフ

宮城県仙台市生まれ。福祉と仕事の新しい関係を紹介する『Good Job! Document』（一般財団法人たんぼぼの家発行）に感銘を受け、2014年夏に特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局を訪問。その後、福祉施設の商品開発事業、研修事業、販売会をサポート。2014年度からは、本モデル事業に従事。障害のある人の個性や潜在能力、また個性を発揮する環境づくりに関心がある。

**武田和恵**（たけだ・かずえ） 宮城県

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

エイブルアート・カンパニー東北事務局スタッフ

山形県山形市生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部卒業。学生の頃、障害のある人のアートに触れ、「障害のある人に関わりたい!」という一心で山形市の福祉施設で働き始める。10年務めた後、ケアとアートに関わりたいと発起し、2012年4月から一般財団法人たんぼぼの家のスタッフとなり、東日本大震災の復興支援プロジェクトの東北現地事務局として、被災地の障害のある人の仕事の復興支援に携わる。

**柴崎由美子**（しばさき・ゆみこ） 東京都／宮城県

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン代表理事

エイブルアート・カンパニー東京事務局

宮城県仙台市生まれ。1997年より奈良・たんぼぼの家で障害のある人たちの表現活動に関わる。「たんぼぼの家アートセンターHANA」（奈良）のディレクター（2004年4月～2009年3月）を経て、障害のある人のアートを社会に発信し仕事につなげる 「エイブルアート・カンパニー」事務局（2007年～）、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン事務局（2012年～）。障害のある人とともに、社会に対して新しい価値を提案するプログラムを探索し実践していくことをライフワークとしている。エイブルアート東日本! のネットワーク構築をめざし奔走中。



特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン  
について

1995年から「エイブル・アート・ムーブメント（可能性の芸術運動）」を提唱し、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動をすすめています。企業・行政・市民と協働しながら作品や表現のアウトプット、環境を支えるための人材育成、障害のある人たちとともに鑑賞・対話・創作・国際交流・災害復興支援活動などを行い、障害者アートの社会的意義を問う事業を実施しています。

障害者の芸術活動支援@宮城

厚生労働省により、ポストモデル事業として「障害者の芸術文化活動普及支援事業」が2017年度（平成29年度）よりスタートします。わたしたちは、次の事業を提案し活動を推進します。

1. 障害者の芸術活動支援センター（SOUP）【継続】

相談の窓口の設置／人材育成のための研修（美術・パフォーマンス・鑑賞支援等）／関係者のネットワークづくり／調査・発掘、評価・発信／展示会の開催を実践していきます。

2. SOUP芸術の学校【新規】

障害のある人の生涯学習の場として「SOUP芸術の学校」を提案します。

3. 障害のある人によるアートをコンテンツとした

ソーシャルビジネスの展開【新規】

NPO法人エイブル・アート・ジャパン（東京）が推進している、ギャラリー事業／ショップ事業／ライセンス事業を宮城でも実践していきます。

4. 「障害者の芸術文化活動普及支援事業」を通した

国内の中間支援組織のエンパワーメント【新規】

宮城県で実施してきた活動のノウハウを、これから活動する中間支援組織などに普及することにつとめます。

まぜると世界が変わる  
障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城  
2016-2017

発行日：2017年3月31日

企画・編集・発行  
特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

東北事務局  
〒983-0851  
仙台市宮城野区榴ヶ岡5番地  
みやぎNPOプラザNO.16  
TEL. 070-5328-4208 FAX. 022-774-1576  
MAIL:soup@ableart.org  
URL:http://soup.ableart.org/  
Facebook:http://www.facebook.com/soup.miyagi

東京事務局  
〒101-0021  
東京都千代田区外神田6-11-14  
アーツ千代田3331 #208  
TEL. 03-5812-4622 FAX. 03-5812-4630  
MAIL:office@ableart.org  
URL:http://ableart.org/  
Facebook:http://www.facebook.com/ableartjapan

編集  
高橋創一


写真  
三浦晴子 (halken LLP)

イラストレーション  
牧稔 (特定非営利活動法人ボラリス)

アートディレクション・デザイン  
アイハラケンジ (halken LLP)

デザイン  
大沼兄昌 (ケイクスデザインオフィス)

助成  
平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業  
(厚生労働省補助事業)



まぜると世界が変わる

SOUP

Sign × Open × Upset × Planet